

○ 読書療法により

- ・学習の意味や価値の認識を深め、学習への関心を高めたこと。
- ・読書をとおして自分の生き方や将来の進路を考えさせたこと。

(イ) 因子別に問題をもつ生徒（「M-S D」以下の得点の生徒）数

因子名	男子値		人数		女子値		人数	
	M-S D		人数		M-S D		人数	
	昭57	昭58	昭57	昭58	昭57	昭58	昭57	昭58
○ 自主的学習態度 (学習にとりくむ態度)	8.2	7.9	4	3	10.9	10.3	1	3
○ 達成志向の態度 (学習を追求する態度)	9.1	9.7	5	2	10.0	10.6	2	4
○ 責任感 (学習を追求する態度)	10.5	9.7	4	1	12.3	11.0	4	4
○ 従順性 (学習への心的傾向)	10.2	9.3	3	3	12.4	10.5	4	3
○ 自己評価 (学習にとりくむ態度)	9.7	12.4	1	4	12.7	12.3	3	3
○ 失敗回避傾向 (学習にとりくむ態度)	11.0	11.8	5	3	10.4	10.5	5	1
○ 反持続性 (学習を追求する態度)	6.9	7.7	3	3	8.3	8.0	3	4
○ 反(学習)価値観 (学習への目的意識)	10.8	10.9	2	4	10.3	12.2	4	2

<考察>

(M-S D)

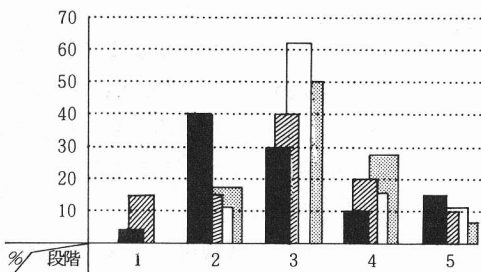
以下の得点の生徒が5人以上の因子を、この学級の「問題のある因子」とみた場合、研究第1年次は男子では「達成志向の態度」「失敗回避傾向」が、女子

では「失敗回避傾向」がそれぞれ問題のある因子としてあげられた。研究実践後の第2年次には因子「達成志向の態度」に問題をもつ男子は5人から2人へ、因子「失敗回避傾向」に問題をもつ男子は5人から3人へ、女子では5人から1人へと減少している。このことは、この学級の生徒に、目的達成への努力の態度、学習の持続性が育ってきた表れであると考えられる。

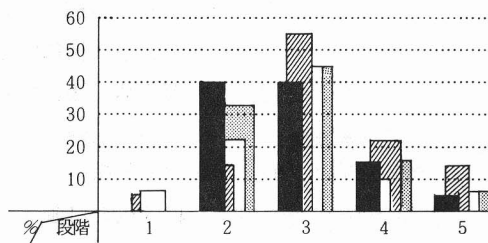
これらの変容は学習意欲を高める心理的治療（カウンセリング的アプローチ、行動療法的アプローチ、読書療法など）を重視して、学級担任が日常の指導に当たった成果であると考えられる。

(ウ) P得点、N得点、T得点の段階ごとの割合

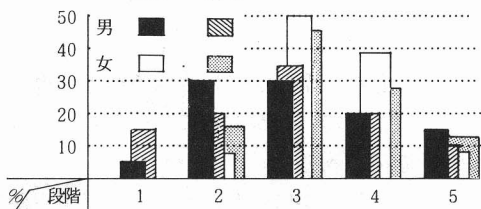
T得点



N得点



P得点



<考察>

積極的な面での学習意欲は研究1年次に比して2段階以下が35%で変わらない。女子も3段階以上が83%で大きな変容はみられない。1年次同様2年次も学習意欲は女子優位の形である。

N得点でみると、男子は2段階が減少し、3、5段階が増加している。女子は3段階を中心にしてまとまりのある状態を示している。